



佐高 SGH通信 2017

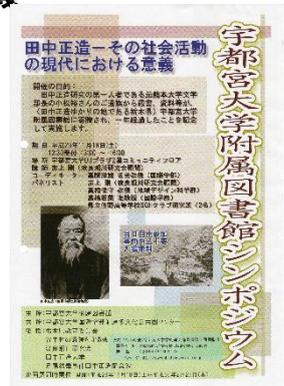
No. 35 (平成29年11月27日発行)

宇都宮大学附属図書館シンポジウム

11月18日(土)、宇都宮大学で同シンポジウムが開催されました。「田中正造—その社会活動の現代における意義」というテーマで、本校のSGH水俣研究班の**新井康平君**と**須藤悠希君**(高1-1)がパネリストとして参加しました。研究班の2名は、大学の専門家の話を聞いた感想や今後自分たちにできることなどについて、堂々と話をしました。

《シンポジウムのプログラム》～田中正造—その社会活動の現代における意義～

1. 開会の挨拶
2. 足尾銅山鉱毒事件の概要説明 高際澄雄 (宇都宮大学国際学部 名誉教授)
3. 基調講演 講師：赤上 剛 (渡良瀬川研究会顧問)
「一身以て公共に尽す」を生涯実践し続けた田中正造」
4. パネルディスカッション
コーディネーター：高際澄雄
パネリスト：赤上 剛 (渡良瀬川研究会顧問)
高橋俊守 (宇都宮大学地域デザイン科学部 教授)
高橋若菜 (宇都宮大学国際学部 准教授)
新井康平 (佐野高校SGHクラブ研究班)
須藤悠希 (佐野高校SGHクラブ研究班)
5. 質疑応答及びまとめ



パネラーとして参加したSGH水俣班の代表2名

《1年 新井康平》

歴史の学び方は事実を知るだけではなく、その奥底にある人々の思いを感じることが大切であることを感じた。今後はしっかりと自分の意見を言い、政治の在り方についてもしっかり考えていきたい。

《1年 須藤悠希》

田中正造は最初から偉人だったわけではなく、元々はその時代に生きていた普通の人だったという話を聞き、より身近に感じる事ができた。また、色々な人が政治に関わっていくことが大事だと感じた。

新井君は「私は専門家ではありませんが、これまでの先生方のお話を聞いて、感じたことや自分の考えを話します。」と落ち着いた態度で話し始めました。淡々とした語り口でしたが、一言ずつ言葉を選び、自分の言葉で伝えました。100名近くの聴衆は次第に引き込まれていき、最後は割れんばかりの大きな拍手に包まれました。

続いて発言した**須藤君**は、さらなるプレッシャーの中、自分たちがSGH活動で体験したことは、田中正造が目指してきたものにつながっていることを明確に伝えてくれました。こちら新井君に負けず劣らず、大きな暖かい拍手をいただきました。

シンポジウム終了後、講師やパネリストの先生方から、よく頑張った、とお褒めの言葉をいただきました。パネリストの一人である高橋若菜先生は、「隣で聞いていていて、涙が出そうだった。」とわざわざ伝えに来てくれました。本校生の姿に感動するとともに、とても誇らしく思いました。そして、何よりも彼ら2人にとって大変貴重な体験になったことでしょう。